III. 埋蔵文化財講演会の記録

森と人との物語　ー環境考古学のすすめー

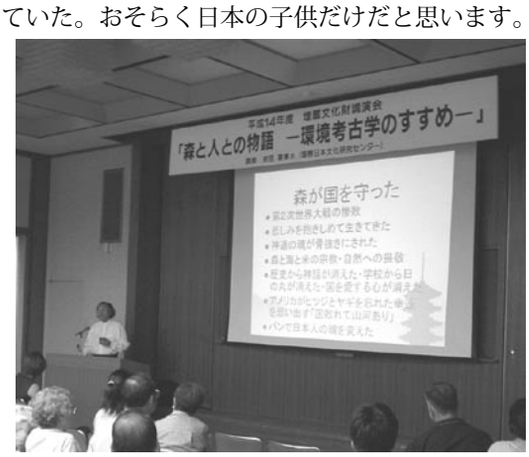
安田喜憲氏（国際日本文化研究センター教授）

1，　復讐の連鎖を断ち切る

今日は「森と人の物語」ということで 1 時間ちょっとお話をさせていただきます。

日本は第二次世界大戦で負けました。原爆で何十万という人々が命を失った。戦争が終わってから 50 年、私たちはしかし、今アメリカを憎いとは思っていない。昨年の 9 月 11 日にニューヨークの貿易センタービルが爆破され、ブッシュ大統領はテレビの演説でこういった。「絶対に許さない。必ずこのテロは撲滅する。仕返しをする。」と。第二次世界大戦で、何十万という日本人がアメリカ人の手によって殺された。けれども、アメリカに対して仕返しをしようなどと思った人はいない。思う力もないまでに我々は戦って疲れ果ててしまったということの方が正しいかもしれない。そして今我々は、アメリカに対して敵意を持っていない。しかし、世界はやられたらやり返すという、力のロジックで動いている。「眼には眼を。歯には歯を。」この力の論理は人類が文明を誕生させて以来ずっと持ちつづけているもの。とりわけ畑作牧畜民という、これからお話します、家畜を飼う人たちの文明に極めて特徴的なものです。肉を食べてミルクを飲んでパンを食べる人、こういう人々の文明は戦闘的なんです。

8 月 6 日の広島の原爆の記念日に小学生が朗読しました。「復讐の連鎖を断ち切りたい」とこう言いました。これはすばらしい言葉です。こんなすばらしい言葉を言える子供は世界にいない、アフガニスタンやアフリカでは幼い子供が銃をとっていた。おそらく日本の子供だけだと思います。



小泉首相の話よりもよほどこの小学生の話の方がよかった（笑）。「復讐の連鎖を断ち切りたい」、「眼には眼を。歯には歯を。」、やられたらやり返すということをいつまでも続けたら、人類は破滅にいくしかない。日本人はすばらしい国民であると私は思いました。しかし、現実の世界はそうじゃない。そういう復讐の連鎖を断ち切りたいと願うような国民は非常に少ない。大半はやられたらやり返すという、「眼には眼を。歯には歯を。」の力の論理で世の中は動いている。我々は戦後 50 年間じっと「悲しみを抱きしめて」生きてきた。

戦争の哲学を提供した国家神道、これは戦後骨抜きになりました。しかし、やっと我々はその神道の哲学の重要性がわかってきた。森を崇拝し、鎮守の森を造るという、その森の宗教の重要性がわかってきた。戦後のアメリカ政策の中でマッカーサーはいいことをやってくれた。農地解放とかいろいろやった。しかし、その中で 1 つ重要なことを忘れた。それは羊やヤギを日本列島に放牧するということを忘れた。だから、日本列島には森が残った。その森が残ったことによって、我々日本人の心の中に森の心、森の文化の伝統が絶えることなく 50 年間維持された。これは大変我々にとって幸いだった。しかし、大きな誤りもあった。例えば、日本人の歴史観がそれである。戦後の 50 年間の日本の考古学や歴史学は、マルクス史観という歴史観に翻弄され、今も翻弄されている。学校で日本の神話を教えない。もっとひどいのは、日本の国家のシンボルである日の丸を掲揚することを、学校で拒否した。復讐の連鎖を断ち切りたいというすばらしい人類史の哲学をいえる一面において、日本の国を愛する気持ちを、戦後の日本の教育は考えなかった。それはマルクス主義という歴史観が、日本の歴史学会を支配した結果生まれたマイナスの産物です。とくに考古学はこのマルクス史観に強く支配された。それが日本の考古学の発展にマイナスになった。戦後日本の知識者階級の左傾化は、日本に大きなマイナスをもたらした。

2，　宗教を見失った日本人

そしてもうひとつ、アメリカは羊やヤギを放牧するのを忘れたのですが、しかし、彼らは神道の魂を骨抜きにして日本人の世界観とりわけ宗教観を葬り去ろうとした。だから今の若い者だけじゃない、戦後の団塊の世代の日本人は自分は無宗教だと思っている。しかし、結婚式は教会であげて、七五三のお祝いは神社であげて、葬式は仏式でやる。宗教をもつかどうかは、人間以外の眼に見えないものを崇拝する心をもつかどうかということと深くかかわっている。眼に見えないものの存在を感じるかどうかという気持ちが、宗教心があるかどうかというもののまず出発である。日本人はまさにそれをもっている。ですから日本人全員が宗教を持っているのです。大木にさえ「しめ縄」を巻いて崇拝している。大木にも神様がいると思っている。そういう国民が無宗教であるはずがない。我々日本人は世界の中でも最も宗教的な人間である。ところが、それを戦後我々はパスポートに書くときに「あなたは何の宗教を信じてますか」と言ったら、「無宗教です」と日本人は言う。ヨーロッパ人はびっくりするわけです。「宗教なくしてよく生きてますね」と言う。そうじゃない、我々は万物の中に命がある、万物の中に神々が宿っていると信じているのです。国際日本文化研究センターの山折哲雄所長がこれを「万物生命教」って名前を付けましたが、まあアニミズムですね。それが基本にあるんです。だから我々日本人ほど宗教心の強い国民はいないんです。

3，　何を食べるかが心に影響する

戦後、アメリカが行った政策の中で、日本人の魂を腑抜けにする上において成功したものが 1 つあります。それは「アメリカはパンで日本人の魂を変えた」んです。戦後、日本は食糧難に直面しました。そのときアメリカは余った小麦粉をどんどん日本にもってきて、学校給食に当てた。「パンを食べろ、パンを食べろ、パンを食べろ。」そして私たちは脱脂粉乳を飲まされた。いつしか私たちは味噌汁や魚や、米を食べなくなった。いまどきの子供は大体そうです。インスタント食品を食べている。これが日本人の魂を腐らした原点であると私は思うんです。

実は人間は何を食べるかということによって、心と体のあり方に大変大きな影響を受ける。人間が何を食べるか、これが心のあり方、体のあり方を既定する。体のあり方を既定するのはわかりますよね。いまどきの子供はどんどん大きくなっている。それだけじゃない。心そしてさらに文明や文化のあり方、そしてさらに自然のあり方にまで、実は人間が何を食べるのかによって大きな影響をもたらすのです。

私たちは伝統的に米と魚を食べ味噌汁を飲んできました。こういった文明のことを「稲作漁撈文明」という。人間は生きるためにタンパク源がどうしてもいりますから、お米を食べる人々は魚を食べます。そして味噌汁を飲む。こういう世界観の根底にあるものが、たとえば神道と仏教です。これに対して、パンと肉を食べ、そしてミルクを飲むこういう文明を「畑作牧畜文明」といいます。この人たちはタンパク源を肉からとります。そしてその宗教はキリスト教です。

私たちは今までは、米と魚を食べ、味噌汁を飲む食生活がダサい、同時に神道もダサい。これに対して、パンを食べ、ミルクを飲み、肉を食べるのがモダンでかっこいい。だから、戦後どんどん朝飯はパン食に変わったわけです。しかし、その何を食べるかということが、人間の心と体だけじゃない文明のあり方、そして、自然のあり方にものすごく大きな影響を与えるのです。

しかし、パンと肉を食べる人も、馬刺しとか鯨は食べない。畑作牧畜民の人々は、馬刺しは食わないんです。なぜ馬の肉は食わないか。それは彼らにとって馬というのは聖なる動物だからです。キリスト教の世界では聖なる動物です。そしてもっとも重要な家畜だったからですね。馬は食わないんです。馬を食べる人間は野蛮人です。鯨も同じですね。今は彼らはこう言うんです。「鯨を食べる人間は野蛮人だ、だから鯨を取るな」と言う。しかし、アメリカ人はかつて鯨を大量に取っ

たわけですね。何のために捕ったか。油を取るためですよ。肉は食べないから全部捨てた。そして油を取るだけのために大量の鯨を殺したわけです。ところが、日本人は鯨を捕りますけれども、皮から骨にいたるまでのこすところなく、全部利用しますね。ところが彼らは勝手ですよ。なぜ鯨は食べちゃいけないのか、イルカは食べちゃいけないのか。それは、聖書に鯨やイルカは聖なる動物であると書かれているからです。それだけの理由です。これを今我々に押し付けているのです。

4，　気候の乾湿の違いが食べ物の違いを生んだ

それでは、なぜこういう食べ物に対する考え方の相違が生まれたのでしょうか。それにはユーラシア大陸の雨の降り方がたいへん大きな意味をもっています。私たちが住んでいる所を、モンスーンアジアといいます。雨がたくさん降るんです。しかも雨は植物の生育に適した夏に中心的に降るんです。ですからここでは、夏作物としてのイネが主要な作物になります。そしてタンパク源は魚を食べます。これに対してユーラシア大陸の西の方、こういったところは、雨が主として冬、降るんです。しかも雨の量が日本の２分の１から５分の１くらいなんです。植物の生育に適さない冬に雨が降りますから、ここでは、冬作物としての大麦や小麦などの冬作物を栽培します。秋に種をまいて、冬にゆっくり成長して、春に収穫を致します。そしてタンパク源としては、周辺の乾燥した草原に住んでいた家畜を取り入れて、そのミルクを飲んで肉を食べるということがこちらで引き起こされたんです。だから稲作漁撈民と畑作牧畜民がどうして生まれたかというと、ユーラシア大陸の雨の降り方の違い、これが大きく２つの人類文明史のあり方を生み出したわけであります。

5，　稲作は馬鹿ではできない

マルクスという人は「アジア的生産様式」という言葉を使った。これはどういうことかと言うと、アジアは未開で野蛮だという代名詞がこの「アジア的生産様式」です。その「アジア的生産様式」の中心をなすのが稲作漁撈です。米を作る人間は未開で野蛮だと戦後の歴史学者はずっと考えていたんです。しかし、小麦を作るのはどうやって作るかと言うと、地中海地域では、冬雨が 11 月頃降り始めると、畑を鋤で起こしてその後に、種籾を撒いて、それでもう後は収穫まで何もしないんです。雑草取る必要もないんです。なぜ雑草を取る必要がないかと言うと、冬は雑草が生長しないからです。収穫の季節まで何もしなくてもいい。これは知識のない奴隷でもできるんです。ところが、稲作は馬鹿ではできないですよ。本日は、お米を作った経験のある方がたくさんいらっしゃると思いますから、言うまでもありませんが、お米がどうやってできるかを知らない子供もいますから、ちょっと言います。お米はまず、種籾を選別しなくてはならない。苗代を作って、苗床を造って、そして田植えをして、そして５月から６月には、水を時間単位で変えなくてはならない。それだけじゃない。田の草を取らなくてはならない。これはもう、生産意欲のない人間では絶対できないんです。馬鹿じゃできないんですよ。そしてやっと収穫ができるんですね。これは麦作農業よりもはるかに複雑な農業のやり方です。そういう社会がアジア的生産様式と呼ばれて、未開で野蛮の生産様式の代名詞として使われてきたんです。戦後 50 年間の歴史学者と考古学者はそれを世界一すばらしい学説だとみなしてきた。だから、稲作を行ったような人間が文明というものを持つはずがないと思っていたわけです。麦作・畑作牧畜民の人々はこれはすごい文明を持っている。メソポタミア文明、エジプト文明、インダス文明、黄河文明、これは全部畑作牧畜民の人々が作った文明です。しかし、稲作はこれは「ウンコ臭い」のがいいとこだ（笑）。僕はアメリカのワシントン大学の教授が日本にきたときに、日本を蔑視してこういう事を言ったのを忘れることができません。「日本は stinky だ」と、ウンコ臭いということですよ。つまりウンコ臭いということはどう言うことか。これは、日本が人間の排泄物を循環的に利用

しているということです。その臭いは循環社会のシンボルです（笑）。日本の農村は人間の排泄物を循環的に利用する極めて循環的な社会。だからウンコ臭いんです。そういう社会を我々は恥ずかしいと思ってきた。ところが実はそうじゃない。稲作漁撈社会はすばらしい自然にやさしい農業を維持して、そして 21 世紀の地球環境問題の世紀に、際めて大きな役割を果たす農業ということが分かってきた。そしてその稲作農業をやった人々が文明というものをもっていたんです。

6，　風土的過去を大切にする

もうひとつ戦後の日本の教育で大きな過ちがあった。子供たち、いや皆さんが、日本という国の風土的・歴史的な過去を背負って生まれてきた存在であるということを教えなかった。学校の教育で風土という言葉を使うと封建的だ、反動的だ、右翼だという風によく言われた。風土的過去、その風土的な過去から自由にならなくてはいけないと戦後の日本の教育は教えた。日本人が背負ってきた歴史的・風土的な過去は、全くマイナスなものだ、それを捨て去って、そして新しい未来へと羽ばたかなくてはならないというのが戦後日本の教育だった。風土的過去というのは封建的・反動的なイメージと重なっている。ところが我々は縄文人からの DNA を背負って生きているんです。我々の背中には何千年という縄文時代以来の DNA が、インプットされているのです。それが風土的な過去です。そんなもの断ち切ろうと思っても断ち切れない。ところが戦後の日本の教育は、日本人はそういう風土的過去のゆえに誤った方向に導かれたんだ、それを断ち切ろう、断ち切ろうと教えてきた。その一例が日の丸です。日の丸というのは太陽です、太陽は稲作漁撈民のシンボルです。稲作漁撈民は太陽を最大の神様として崇拝してきた。それをシンボル化した国旗を、学校教育で掲揚するということを否定したのです。そんな国民は世界広しといえどもいない。復讐の連鎖を断ち切ると同時に、やっぱり自分たちの風土的な過去・歴史的過去を大事にしなくてはならない。それを学校で教えなければいけないのにもかかわらず、歴史教育の中で神話そのものが取りあげられることさえなかった。日本の神話がなぜ学校教育の中で取り上げられないのか。むしろ神話がなくて困っている国民がいる。例えばアメリカ。アングロサクソンのアメリカ。彼らは神話がないんです。神話がないから何か神話に変わるものを、何かを造りたくて仕方ないんです。アメリカインディアンの人々を追放して作りあげた国家だから、国家のルーツにかかわる建国の神話がない。ところが我々は神話を持っている。日本国家のルーツ、日本国民のルーツとしての神話を持っている。なぜそれを学校できちんと教えないのか。私には理解できないんです。

7，　日本文明の原点は縄文にある

こう言う視点から日本の文明を論じてみたいと思います。日本人は森と海の宗教をずっと持ちつづけてきた森の民、海の民であり、そしてその後、弥生時代がやってきて稲作漁撈の民となった。その原点はどこにあるか。森の民、海の民の原点は縄文にあります。

それは縄文の土偶に見事に表現されています。私の専門には「環境考古学」というタイトルをつけていますが、純粋の考古学者ではありません。最近はインターネットが盛んですからね、考古学者の中には陰湿な方がいらっしゃって、考古学者同士でインターネットをやりあってるんですよ。たまたま僕はそれを観て、なんて書いてあるか。光栄だったですけど、「安田はトンデモ系だ」、とんでもない考古学者だと書いてあるんです（笑）。トンデモ系の代表だと書いてあるんです。僕は大変うれしかったんですけれども、今の考古学者にトンデモ系と言われる事はうれしかったです。今の考古学者自身がトンデモ系だからね。その彼らからトンデモ系と言われる僕はまともということですよ（笑）。

その縄文時代は女性中心の社会。なぜ女性中心の社会か、それはこの土偶に示されているように、大半の土偶が女性です。縄文時代というのは、

目と強調されているのは下腹部です。これは共に命の誕生と死に関わるところです。何でこの目をこんなに大きくしたか。マルクス史観、唯物史観に毒された考古学者は、これをエスキモーの雪メガネと言ったんです。そんなアホなことをよく言うなと思いますよ。この巨大な目はそんな生易しいものではありません。なぜ彼らがこんな大きな目を造ったのか。それは、目というのは亡くなった時にお医者さんが「お亡くなりになりました」というのは、瞳孔の拡散をみることで眼の力がなくなったことで最近までは生死を判別していたんです。縄文人もそのことを知っていたんですよ。人間が死ぬと目の力がなくなる。だからとにかく目の力を復活すれば命が生まれかわれる。そして土偶は大半が妊娠している妊婦です。そして彼らは子供が生まれる下腹部に異常な集中を示しています。ここには見せておりませんが、割れ目もちゃんと入っております。これパンツはいているじゃないかと、みんな言うくらいに丁寧に下腹部を造形しているんです。そして髪の毛は蛇ですね。これも全部僕が言ったこと。日本の考古学者は誰もまだ信用しません。盛り上がった髪の毛、なぜ蛇か。それは、蛇が脱皮をするということから、命が生まれ変わるシンボルだということです。それが 1 つの重要なことです。ですからこの土偶には、命の誕生と死というものがその中にシンボライズされている。

なぜ縄文人があれほどに縄文にこだわったか。縄文土器の縄文、これは縄でしょ。縄を土器全面に造形しているわけです。何で三角や四角でいけなくて、縄なのか。しめ縄というのは実は二匹の雄と雌の蛇が交尾している様をあらわしたものなんです。雄と雌の蛇が交尾するときには、しめ縄のように絡まる。しかもその交尾の時間が、半日以上に及ぶわけです。半日以上雄と雌の蛇が愛を交わす、それはたくさん子供が生まれるという豊穣のシンボルなんです。だから我々は、そのしめ縄を神社で聖なるところに飾るわけです。

亀ヶ岡式の遮光器土偶の髪の毛が盛り上がっている。なぜ盛り上がっているのか。それは蛇を意味しているのです。そして下腹部を入念に造形している。三内丸山遺跡から出た板状土偶は、パンツをはいてるといわれるくらい丹念に下腹部を造形している。ところが、おっぱいは小さいのです。あれだけ命が生まれるところには人々が注意払っているにも関わらず、子供を育て、ミルクを飲ませるおっぱいが小さいのです。申し訳程度にちょこんとついているだけです。

縄文人はおっぱいには注目はしないんですけれども、下腹部には異常な執着をしているのです。こういう話をするから僕はみんなからトンデモ系といわれるのだと思いますけどね（笑）。まあ私の妄想ですね。皆さんも妄想してください。浮世絵を思い出してください。浮世絵でどこが強調されてますか。男と女が絡んでいる時に最も強調されているところはあの下腹部でしょ。おっぱいを強調したような浮世絵はめずらしい。それほどまでに、日本人はなぜか縄文時代から江戸時代、現代もそうですが、下腹部、命を生み出すところに異常な執着を持っています。こういう話をするとそんなことはない、全世界共通だというでしょ。次のものをお見せします。

8，デカパイとペチャパイの大地母神

畑作牧畜民の人が作った大地母神像は、ものすごく大きなおっぱいを持っています。これを申し訳ないですが、デカパイと言わせてください（笑）。いろいろ考えたんです。デカパイというのはセクハラにあたるんじゃないかと？しかし、巨乳とか大きなお乳とか、いうのは言いにくいので、とりあえず、デカパイとペチャパイで統一させていただきたいんです。西アジアのトルコチャタルヒュユク遺跡の 8000 年前の大地母神。シリアのマリ遺跡の 7000 年前の大地母神ですがもっとも強調されているところが、おっぱいなのです。しかし、見てください。下腹部は申し訳程度か、全く造形されていない。どうしてか。ここに、人間が何を食べるかによっての心のもち方が相違することが示されています。このチャタルヒュユクやシリアのマリ遺跡のある畑作牧畜民の社会では、生きるために家畜を飼って、そのミルクを飲むというこ

とが必要なんです。これが最も重要な生き残り戦略なんです。そのミルクを飲むために、ミルクを供給するその乳房が最も重要なものとして強調されているんです。乾燥地帯では水が無くなったときに命を守るのはお母さんのお乳でね。これに対して縄文時代には家畜はいませんでした。ですから、家畜のミルクを飲むということがまずありませんでした。しかも日本列島は水に恵まれた「森と水の国」ですから、水はいくらでもありました。だから干ばつに見舞われて水がなくなるということはないんです。それよりは、命が生まれる下腹部こそが重要だったということです。こういう話は日本の考古学者は絶対しませんよ。だから多分、ここで聞いておられる愛知県の埋蔵文化財センターの人は、しまったなあこんな人呼ぶんじゃなかったと思っていらっしゃるんじゃないかと思うんですけど（笑）。

9，　高精度の環境史の復元

しかし、僕はそういう馬鹿な研究ばかりしているわけではありません。まあどちらかというとそちらの方を一生懸命やっておりますけれども（笑）、私の本業は湖にボーリングを致しまして、そして土を取る、土を取りますと、湖底の堆積物の中に縞々が見つかった。これはアジアでは初めて僕たちが見つけた。これは実は年輪と同じものであることがわかった。

年縞というのですが、白い部分が珪藻という藻が繁殖して春から夏にかけてできたもので、黒い部分が秋から冬にかけて湖の粘土鉱物などが静かに堆積してできたものです。この白黒の層がセットになりまして年輪と同じ一年を形成します。それが湖の底に 10 万年近く堆積していることがわかりました。それを分析すると、まず最初に、確実な時間軸が得られるということです。今までの年代というのは放射性炭素同位体という方法で測ったものです。放射性の炭素同位体というのは ± 100 年とか 200 年という統計上の誤差がつきます。そうすると、± 100 年という誤差がつきますと、例えば歴史と気候の関係を調べようとするときに、100 年という誤差がついたら、歴史は数年の単位で変わりますから、その原因が気候変動だったというためには、まさにその事件が起こった時代の環境を復元しなければ、説得力がないわけです。ところが、放射性炭素同位体で測った年代というのはどうしても ± 100 年とか 200 年という誤差がつきますから、多分そうだろうという推定の域を出ることができなかった。ところがこの、年縞というものを発見して、細かく分析することによって、例えば上から数えていって 1000 本目、これは 1000 年前に限りなく近いわけです。10000 本目、10000 年前に限りなく近い。ということは、過去の環境を今や数年の単位で復元できるようになったということです。その年縞の中には、花粉の化石であるとか、珪藻の化石、そういうものが含まれています。それで、お手元の資料、これは私が作ったものではありません。愛知県の埋文センターの人がわざわざ作ってくださった年縞、年層というようなものを使って過去の気候変動を復元した結果です。それをみると、グリーンランドでは氷の中に 1 年に 1 本ずつできた縞々があるんですけれども、その年層の中の酸素の同位体比というものを用いて復元した、過去の気温の変動が示されています。気候というのは千年、万年の単位でゆっくり変わると思っていた。ところが、グリーンランドの平均気温が今から約 14800 年前に、50 年の間に一気に 7 度から 8 度も上がることとがわかった。50 年って、僕は 55 歳ですから僕が生きている間に、生まれてから死ぬまでの間に、7 度も 8 度も年平均気温が上がったらどういうことになりますか。そういうことが



過去に起こっていたことが分かったんです。

これほど激しく地球の気候は変動したわけです。とくに温暖化のスピードが異常に早いということがわかってきた。今から約 14800 年程前にベーリングという大きな温暖期が訪れます。この温暖期のときに西アジアでは森が拡大するんです。そして、そこで人々が定住革命を成し遂げるんです。今まで狩猟採集で移動していた生活をやめて定着した集落を営むようになる。そして、その森の中で、植物を利用する技術をマスターするんです。ところがその温暖な時代が今から約 12800 年前に終わるんです。終わってヤンガー・ドリアスという寒の戻りが起こるんです。この寒の戻りのときに、麦作農業が誕生するということがわかってまいりました。これは過去 2000 年間の気温の変動と民族移動を対比して示したものです。例えば、ゲルマン民族の大移動、モンゴルの大移動。こういう民族の大移動というのはすべて寒冷期に引き起こされていることもわかった。

マヤ文明が崩壊したのは 922 年を中心とする激しい乾燥期。気候が激しく乾燥化したことによってマヤ文明が崩壊したということもわかってきたんです。この 922 年に、マヤ文明が崩壊する頃にいったい何が起こるかと言うと、渤海という国が崩壊しているんです。半世界的に、気候変動が文明の崩壊をもたらしているということもわかってきたのです。

邪馬台国の倭国大乱というのが引き起こされた時代は、いったいどういう時代であったかというと、まさに気候の寒冷期にあたることがわかります。冷夏と豪雪が引き起こされた時代にあたっているわけです。倭国大乱が引き起こされた時代、中国では黄巾の乱という大動乱が起こるんです。これは明らかに気候が悪化して中国の歴史が大きく揺さぶられ、それが日本に影響して倭国大乱を引き起こしたというようなこともわかるようになってきました。これはほんの一例ですけども、こういう風に過去の気候の変動の復元が今や極めて精緻になっている。ですからそれをもって歴史を解釈するということがかなり進展してきたわけです。

10,　高精度の自然改変の歴史の復元

人間が何を食べるかということによって、心と体の在り方だけではない、自然に対するインパクトが大きく違う、ということを申し上げたいと思います。パンを食べ、肉を食べ、ミルクを飲む人々は森を徹底的に破壊するという性格をもっているのです。小麦粉を粉にして、パンを焼くためには燃料が要る。パンを食べるということは、大量の燃料を消費するということと同じです。我々、ご飯を炊くときはご飯を粒状にして炊きますね。米は粒状にして食べます。これはお湯を下からグツグツグツと煮ればいいことです。その火力に比べて、パン焼き窯の火力はすごいんです。パンは焼かないと食べれません。日本人はパンを焼かないで、麦こがしってありますね。私たち食糧難のとき、麦をひいて、砂糖を混ぜて、水で練って食べたことありますけど。ぜんぜん燃料使いません。しかし、パンは焼かなくてはならない。焼くということは燃料を使うということです。そして同時に羊やヤギを飼う、魚を食べないで羊やヤギを飼うということは、これは森を破壊するということになる。森を置いておいても何の役にもならない。しかし、羊やヤギを飼えば、肉は食べれるし、ミルクは飲める。そうすると森に羊やヤギを放牧して森を破壊するというこういう生業を畑作牧畜民の人々はとるわけです。

これに対して、魚を食って、米を食べる人間は森を守るんです。魚をたくさんとるためには魚つき林といって森がなければならないでしょ。しかし畑作牧畜民の人々にとっては森は無用の長物です。そこを牧草地に変えたほうが生産性は上がるわけです。こうして徹底的に森が破壊されていきました。

これはシリアのガーブバレイの花粉分析の結果ですけれども、今から約 10000 年前にすでに激しい森の破壊が行われていることがわかります。それは羊やヤギの放牧がはじまる時代とぴったりと対応しています。

そしてこの現在の肥沃な三日月地帯の風景で

す。木一本ない荒野になっています。これが畑作牧畜民が果たした人類に対する罪悪ですね。原罪と言います。肉を食べ、ミルクを飲むこういう人々の持った原罪、それは森を食いつぶしたことにあります。これはアダムとイブの絵ですね。いろんなアダムとイブの絵がありますが、私はこの絵が一番好きです。実はこの女性のなまめかしいスタイル、デカパイではありません（笑）。このアダムとイブは楽園を追放されるのですけれど、なぜ楽園を追放されたのか。エデンの園というのは、森ですね。森を追放されるということです。アダムとイブがなぜ追放されたのか。それは彼らが文明の原点に森を破壊し尽くすという性格を持っている、ということをここに見事に示しているわけです。

キリスト教は羊を崇拝します。この羊が先ほど申し上げたように問題なのです。羊を食べるということ、羊の毛皮を利用するということ、これが森を破壊するということになるのです。羊が若芽を全部食べてしまって、二度と森は再生しない。ヤギはもっとひどいんです。根っこまで食べてしまうんです。

イエスは言った。蜜と乳のあふれる花園がユートピアである。なぜイエスは森がユートピアであるとおっしゃらなかったのかなあと考えたことがある。その原因がわかりました。すでにイエスがお生まれになったときには、もうイスラエルの森はほとんど破壊されていた。もう西アジアの森は壊滅状態だった。だからイエスはこの豊かな森を見ることがなかったのです。もしイエスが豊かな森を見ておられたら、これは森こそがユートピアであるとおっしゃったでしょう。しかしイエスがお生まれになったときには、地中海は森を破壊した後に生まれる二次植生としての花園におおわれていたんです。

これがトルコのハサン山。聖なる山なんですけど、これも実はデカパイ山なんです。この西アジアの畑作牧畜民の人々にとって聖なる山というのは必ず２つあるんです。日本の聖なる山、例えば富士山、奈良県の三輪山、これはみんな独立峰です。岩木山でもそう、独立峰です。これはなぜかと言うと、蛇がとぐろを巻いた姿をシンボルライズして、聖なるものとして崇拝しているんです。だから富士山にしても、岩木山にしても、三輪山にしても独立峰なんですが、ところが畑作牧畜民の社会では二つの峰のある山、これが聖なる山なんです。つまりこれは、デカパイを示すんです（笑）。

そして彼らは森を破壊した後、海をも砂漠に変えました。地中海が海の砂漠になってしまった。なぜ地中海には魚がいないか。それは森がなくなったからです。地中海の海岸には海藻ひとつ落ちていない。真っ白い砂を見て貝だと思ったんです。違うんです。全部石です。石灰岩の結晶のいい方解石なんです。地中海には貝殻なんて１つも落ちていません。つまり、パンを食べミルクを飲み肉を食べる人々とは森を破壊して大地を砂漠に変えると共に、海をも死の砂漠に変えたんです。だからこんなところで泳いだって健康によくないですよ。人間以外の命がない。どこを見たって砂しかない。海藻ひとつないんです。そんなところでトドのように甲羅干しして。何がこれが幸せなのかと思いました（笑）。

11，　人類文明史の２類型区分

人類の文明史には森の民と家畜の民の２つがあるということです。これは 15 世紀の段階の、世界の森の民と家畜の民の分布を示したものですが、大体この西アジアで誕生した、この畑作牧畜民の文明は 15 世紀の段階でユーラシア大陸の大半を支配する。しかし、環太平洋とアフリカの熱帯林があるところ、実はここはミルクの香りとは無縁のとこだった。私たちが調査しております長江文明は、ミルクのにおいとは全く無縁です。先ほど申し上げたマヤ文明、あるいはインカ文明。ここにはリャマとかアルパカがいるじゃないか。でも彼らは、バターやチーズを作らないんです。これも実はミルクの香りのしない文明なんです。

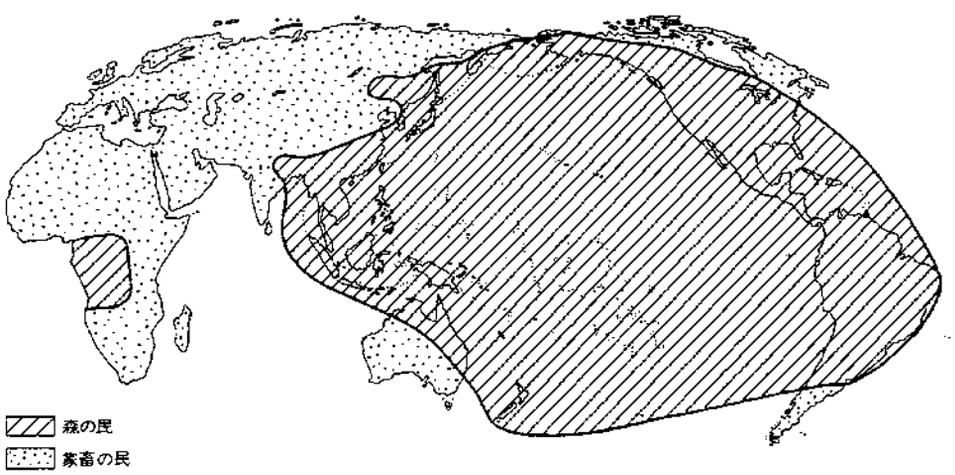
しかし、これらの文明は 15 世紀以降の地理上の大発見に於いて徹底的に侵略破壊をされてしまうんですね。そして日本の文明も森の民の文明で

あると僕はいっています。ミルクと無縁なのです。こう言うところの人々は何が好きかって言うと、それは餅が好きなんです。このあいだドイツの友達が来て福井県の名物は何だといいましたので、羽二重餅だといいました。羽二重餅買ってって、ドイツに帰りました。一ヶ月くらい経って私がドイツに行った。羽二重餅は食べれないと机の上においてあった。口の中へ入れたらネバネバして絶対喉を通らないと言うのです。つまり、パンを食べてミルクを飲んで、肉を食べる畑作牧畜民にとっては、餅が食えないんですよ。我々にとっては餅が食えるってあたりまえでしょ。ダラーとしたあの納豆。あんなものは見ただけで気持ち悪くて彼らはよう食べません。ネバネバしたものが彼らは食えないんです。これは我々稲作漁撈民が元々ミルクをも飲まなかったのと同じです。こちらがミルク文明とすれば、こちらは餅文明だといってもいいくらいですね。違いがありますよ。それで、その餅文明の代表が稲作漁撈文明です。稲作漁撈文明の原点は長江文明にあるのです。

その長江文明のお話しをしようと思いましたが時間がまいりましたので、このへんで終わります。

人類文明史は、人間が何を食べるかによって大きく２つの文明に類型できる。一つはパンを食べ、ミルクを飲み肉を食べる畑作牧畜文明で、もう一つの代表が米を食べ、味噌汁を飲み魚を食べる稲作漁撈文明です。前者の畑作牧畜文明は森を徹底的に破壊し、大地を海を砂漠に変えました。後者の稲作漁撈文明は森を守り水を守り自然にやさしいライフスタイルをとってきました。

人間が何を食べるかということが、人間の体のみでなく、心のあり方、さらには文明や文化のあり方、そして自然破壊のあり方にまで大きな影響をおよぼしているというのが本日の結論です。ご静聴ありがとうございました（拍手）。



動物文明圏と植物文明圏（地理上の発見以前の 15 世紀頃をおおよそのめやすとする）

（安田喜憲『日本よ、森の環境国家たれ』 中公叢書　2002）